

# 異文化への視線（その一）

遠藤 寿一

## 目次

- 一 はじめに
- 二 カントの「悪」の概念
- 三 一般教書と「根元悪」

## 一. はじめに<sup>(1)</sup>

二〇〇一年九月一日、ハイジャックされた民間航空機がニューヨークの世界貿易センターおよびアメリカ国防総省に突入、自爆した。標的がアメリカの経済と軍事力を象徴する建造物であり、テロ実行犯たちが「イスラム原理主義者」であると目されたために、この同時多発テロを西欧文明とイスラム文明の衝突として論じる向きもあったが、ホワイトハウスはイスラム諸国との間に摩擦が生じることを懸念し、この事件が意味しているものは文明間ないし文化間の対立ではなく、またイスラム対キリスト教といった宗教間の対立でもなく、民主主義に対する邪悪なテロリストの挑戦であるという立場をとった。しかし、以下に示すように、イスラム文化を侵食するアメリカ文化への抵抗という意識がテロリストたちの中に共有されていたことは動かしがたい事実だと思われる。また、そうしたテロリストたちの意識を育んだ社会経済的背景へと広く目を転じてみると、二つの文化の不幸な関係は偶発的なものではなく、構造的な要因を持つことがわかる。その構造的なねじれを変革することなしに、単に武力に頼るだけでは、テロの脅威を解消することは困難だろう。

こうした問題意識に導かれ、本論考では、同時多発テロを契機に顕在化した文化間の対立の構造の輪郭を提示し、そのねじれを解消していく文化間関係モデルとして、アフガニスタンにおける中村哲医師の活動について考察してみたい。

本稿(「その一」)では、上記課題のための導入部(寄り道?)としてカントの「悪」についての議論を取り上げる。そしてカントの議論を援用して、テロ支援国家を「悪の枢軸」と名指しし、テロを「邪悪」の側に一方的に位置づ

けようとするブッシュ米大統領の思惑とは裏腹に、哲学的（カント的）「悪」の概念からすると、人間のいかなる行為も「悪」からは免れることはできず、テロの「悪」に対してはアメリカの「悪」があるということを示唆し、実はそれら二つの「悪」は独立したのではなく、構造的に依存関係にある―具体的に言えば、テロリズムはグロ―バリゼーションに構造的に寄生した事象である―ことを論じる「その二」へとつなげる予定である。

## 二. カントの「悪」の概念

ブッシュ大統領は二〇〇二年一月二九日の一般教書演説<sup>(2)</sup>の中で、大量破壊兵器の保有を目指すテロ支援国家としてイラン・イラク・北朝鮮の三国を「悪の枢軸 (axis of evil)」と名指しして非難した<sup>(3)</sup>。当然のことながらブッシュの発言には、「テロ」は指弾されるべき「世界でもっとも危険」な「悪」の元凶であり、テロを支援するがゆえに、この三国もまた「悪」なのだという含みがある。しかしではテロが「悪」だとしても、それはどのような「悪」なのだろうか。回り道になるが、事柄の本質を見極めるために、ここで「悪」にかんするカントの議論に耳を傾けてみよう。

カントは『実践理性批判』と『たんなる理性の限界内の宗教』（以下『宗教論』と略記）の中で、それぞれ異なった観点から「悪」について論じている。まず『実践理性批判』の「悪」論について見てみると、「実践理性の分析論」の中で、カントはこう述べている<sup>(4)</sup>。

「ラテン語を使用する人が善 (bonum)」というただ一語で名づけているものに対して、ドイツ語は二つの極めて

異なる概念と、また同様に異なる表現を持っている。すなわち、*bonum* に対しては善 (*das Gute*) および幸 (*das Wohl*)、*malum* に対しては悪 (*das Böse*) および禍い (*das Übel*) (もしくは不幸 (*das Weh*)) を持っている。」  
(P. V, 59)

カントによれば、幸としての善、禍もしくは不幸としての悪という区分は、善悪を快不快という経験的感情に基づいて判別することから生じるのだが、道徳的な意味での善悪の概念は、行為の仕方、動機に関わっている。つまり道徳的観点からすると、善とは、道徳性の原理(道徳法則)に規定されている意志(自由な意志・自律)に認められるものである。その場合、これに対応する悪は、自己愛(*Selbstliebe*)ないし欲望・傾向性に規定されている意志(不自由な意志・他律)ということになるはずだが、カントはこうした意志を「悪」とは呼ばず、「善でないもの」と表現する。というのも、不自由な選択意志による行為とは、いわば自己愛や欲望といった、内なる自然に支配された行為であり、そこには責任の根拠が存在せず、当の行為に対して責任を求めることができないからである。いたずらをした幼児には責任を帰すことはできず、またその行為を「悪」と呼ぶこともできないだろう。ちなみに、帰責が可能であるためには、当の行為者が理性的な存在であり、行為がその自由な意志によって行われているということが「現実」にそれが確認できるかどうかは別として「一種のフィクション」として要請される。そのため、この自由は「超越論的自由」とも呼ばれる。こうして、『実践理性批判』には「善」の定義はあるが、「悪」の積極的定義は見当たらない。そのような定義が現れるのは『宗教論』においてである。

『宗教論』でも善は『実践理性批判』に準じて定義され、道徳法則に従う格率を採用することが善であると見なされている。しかし『実践理性批判』とは異なり、これに対応する「悪」が定義され次のように説明されている。

「悪の根拠は、選択意志を傾向性によって規定する客体のうちではなく、つまり自然衝動のうちではなく、選択意志が自らの自由を使用するために自己自身に設ける規則のうちのみ、すなわち格率のうちのみ、存することが出来る。」(R, VI, 21)

「格率 (Maxime)」とは個人が自らの行為の指針として自ら設定する規則を指す。つまりカントはここで「悪」を、道徳法則よりも自己愛を優先した格率を採用する意志、いわば「自律的」に他律の立場を選択することと見なしている。これは矛盾した表現のように聞こえるが、悪しき行為を帰責の対象と見なそうとするかぎり、私たちはこうした事態を必然的に受け入れなければならない。どんなに悪しき行為でも、それが欲求や傾向性といった内的な自然によって引き起こされたものであり、そこに行為者の自由意志が介在していないとするならば、その行為者に対して責任を帰すことはできないからである。カントは、理性と感性を併せ持つ人間存在はすべて、こうした性癖を免れることはできないとし、この悪に「根元悪 (das radikale Böse)」(R, VI, 32) という名称を与えた。しかしカントはまた、人間にあつては、こうした性癖が、道徳法則そのものへの反抗を理性の立場から行為の動機として選択するところまで高められることはないと考えている。そのような行為の主体が存在するとすれば、私たちは、道徳法則という理性法則の外部に、この法則を包括する、ないしは相対化する高次の理性空間があることを認めなければならない。しかし、人間にとってそのような空間の想定は不可能である、とカントは考えるからである。このためカントは、道徳法則への反抗を選択する理性を「邪意ある理性 (boshafte Vernunft)」(R, VI, 35) と呼び、そうした理性を持つ者は悪魔的存在者であるとも述べている。

### 三. 一般教書と「根元悪」

前節では悪にかんするカントの議論を眺めてみたが、ここで改めてそれをまとめると、以下のように整理できると思われる。

- ① 経験的感覚的な不快・不幸としての悪
- ② 欲望や傾向性に支配される善でない意志
- ③ 道德法則よりも自己愛を優先した格率を採用する根元悪
- ④ 道德法則そのものに理性的に反抗する邪意を持つ悪魔的存在

この区分に若干の補足を加えておこう。不快や災禍の原因(①)、欲望や傾向性によって行動するもの(②)としては、私たちに不快や災禍をもたらす自然災害や、ゴジラのように本能にのみしたがう存在を挙げることができるだろう。それは倫理の土俵にのる相手、つまり道德的帰責の主体たりうる存在ではない。また、悪魔的存在(④)とは、人間にとっていわば超知性的な(?)存在といえるだろう。それは道德法則の外なる存在である。したがって、ある存在者が悪魔的存在者であると分かったとたん、それは人間にとって①や②のように、その動機が分からない、あるいはその動機を詮索しても意味のない(なぜなら人間には理解不能だから)ものへと変貌する。この場合、この存在者への対処のしかたは①や②に対処する仕方と類似することになるだろう。

こうしてカントにしたがうならば、人間における悪はすべて「根元悪」に収斂する。したがって、テロの「悪」もまた根元悪という観点から理解されるべきである。実際、ブッシュの一般教書でも、「われわれの大義は正しい(our cause is just)」と言われているように、テロとは大義をもつて向かうべき相手つまり、倫理の土俵にのる相手と見なされているのである。一般教書ではまた「われわれの敵」は、圧政と死を大義と信条として受け入れる(「Our enemy」 embrace tyranny and death as a cause and a creed.)」とも述べられている。この部分だけを読むと、テロは③と④のいずれとも解することが可能であるよう思われる。しかしながら、④として読むことはできないだろう。恐らくブッシュはテロは④だと言いたかったのだろうが、④ならばそれは大義を掲げて対峙できる相手ではないのである。というのも④は、そもそも大義というものを否定する、人間の了解外の存在だからである。だから一般教書のこの文言を意味あるものとして理解しようとするならば、それは③の意味でしか可能ではない。つまり、ブッシュは言いたいことを言えていないということになるだろう。

なお、根元悪という観点からさらに付言すれば、人間が根元悪の外に出ることができない以上、純粹に善なる行為というものは実はまずありえない。いかなる行為にも自己愛の要素を見いだすことは可能なのだ。とするならば、(後で見るように)一般教書に示されたようなアメリカの姿勢の中にもまた根元悪は忍び寄っていると考えられるのである。

さて、テロはテロリストの自由な意志によって選ばれた自己愛によって引き起こされた、悪しき所行である。その行為に対し、テロリストは責任を問われなければならない。だが(人間の行為が責任ある行為であるためには、超越論的自由という一種のフィクションが必要であり、その意味で行為は自由になされたのだとしても)、行為そのものは、同時に、物理的社会的な因果関係によって説明される現象でもある。カントの言葉を借りて言えば、行

為は英知界に属する自由の因果性によって引き起こされるが、それは同時に現象界にも属しており、現象界の因果法則にも従っているのである。後述するように、カントは『宗教論』の中で、悪を免れるためには「回心 (Sinesänderung)」(R, VI, 73) が必要だと論じている。これは英知界の住人としての人間が行う、善へ向けての「心術の革命 (Revolution in der Gesinnung)」(R, VI, 47) というべきものである。しかし、悪しき行為が現象界にも属している以上、そうした行為を誘発した物理社会的な原因を排除することによって、当の行為そのものの発生が抑制されるということはある。ブッシュはテロリストを主に物理的に殲滅することに力を注ぎ、武力に頼ってこれを果たそうとしている。だが、テロリストの物理的殲滅は、テロの根絶に一定の成果を上げることとはできるかも知れないが、テロそのものを消滅させることはできない。というのも、テロリストを生み出した社会構造が残存する限り、彼(女)らは再生産されるからだ。その再生産の機構を見るために、次回(「その二」)では、テロリストの悪、正確には、テロリストの自己愛を触発するある種の構造的契機へと考察の視点を移していきたい。その途上で、アメリカの自己愛も議論の俎上に上げられることになるだろう。

(注)

- (1) 本稿は、「第五回『9.11』を多角的に考える哲学フォーラム」(二〇〇二年二月二日、於早稲田大学)で行った報告の一部を修正加筆してまとめたものである。フォーラムの内容については以下のHPを参照の事。

<http://www.47.tok.2.com/home/stimme/>

- (2) 一般教書からの引用(英語原文、日本語訳)は在日米国大使館の以下のホームページに掲載されていたも



のを利用した。

[http://usembassy.state.gov/tokyo/www/hjp\\_0055.html](http://usembassy.state.gov/tokyo/www/hjp_0055.html)

(3) ‘the Axis’ (枢軸国) は第二次世界大戦で、連合国と戦った日独伊三国などを指す言葉である。だが、フレイシャー米大統領報道官は歴史的な含意を否定している。‘evil’という表現について言うと、レーガン元大統領が在任中の一九八三年の演説で、拡張主義的行動で自由主義陣営を脅かしていた当時のソ連を‘evil empire’ (悪の帝国) と呼んだことがある。パウエル米國務長官は、「悪の枢軸」が、レーガン氏の表現をヒントにしたものであることを示唆した。

(4) カントの著作からの引用はアカデミー版カント全集に基づき、本文中に示した。カントの著作は以下のよう  
に略記し、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で記した。

*P = Kritik der praktischen Vernunft*

*R = Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft*